グリーンコープ30周年記念特別企画　30th Anniversary　ありがとう　これからも

グリーンコープ30周年記念特別企画 せっけん

生命（いのち）をつなぐ 水と自然を守りたい

水と緑の惑星、地球。その表面の７割は水に覆われています。しかし、大半は海水で、淡水は2.5％ほど。しかも私たち人間が使える水は全体のわずか0.01％ほどと言われています。

その貴重な水をこれからも使い続けていくために、大切な水環境を守りたい、みどりの地球をみどりのままで子どもたちに手渡したいと、グリーンコープは前身生協の時代からずっと、「せっけん」を使う運動を続けています。

市場に合成洗剤があふれる中、せっけんの利用を増やそうと取り組んできたグリーンコープのせっけん運動のあゆみを振り返り、なぜせっけんが良いのか、過去と現在のせっけん運動を紹介しながら考えていきます。

せっけん運動の歴史を振り返る
グリーンコープは〝せっけん派〟生協

1950～70年代
経済発展による環境汚染が社会問題に

日本が高度経済成長期を迎えた1950～60年代、水俣病が発見・認定され、有害な化学物質（有機水銀）が海に流出したことで食べものが汚染され生命（いのち）が脅かされていることに、日本中が大きな衝撃を受けました。1970年代に入ると、環境汚染や食品公害の問題はますます大きくなっていき、そのような状況に問題意識を持った人たちが各地で生協をつくり、安全な食べものを共同購入するようになりました。

また、合成洗剤の使用が増えたことで、川や海をはじめとする水環境や飲み水の汚染が各地で問題となりました。当時は下水道の普及率が低く、河川から取水され飲み水にもなっていたことから、人体への影響も懸念されました。琵琶湖では合成洗剤に含まれるリンによる富栄養化が原因で赤潮が発生、滋賀県は1979年にリンを含む家庭用合成洗剤の使用禁止などを含めた「琵琶湖条例」※を制定しました。それをきっかけに、合成洗剤の使用を止めてせっけんを使おうという運動が、全国で起こりました。

※滋賀県琵琶湖の富栄養化の防止に関する条例

1970年代後半～
小さな地域生協に集い「生命」の視点で水環境を考えた

グリーンコープの前身生協に集う母親たちも立ち上がりました。水はすべての生命の源。水がきれいでないと安全な食べものは作れない、生命を大切にできないと考えたのです。当時の組合員は、環境を汚しているのは何なのか、自分たちにできることは何かと考え、せっけんについて学びます。その中で、川や海の水を汚す原因がこれまで使っていた合成洗剤だったと知り、自分たちも加害者だったのだと痛感しました。当時の合成洗剤には水生生物に対し強い有害性が指摘されているLAS（直鎖アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウム）と呼ばれる合成界面活性剤が多用されていました。LASは自然界で分解されにくく、成分の大半が環境中に排出されます。一方、せっけんは1日ほどで水と二酸化炭素に分解され、自然の生態系を壊すことはありません。環境を守るために暮らしの中でできることとして、まずは組合員の中で合成洗剤からせっけんへの切り替えをすすめる運動を始めました。

また、小中学校の給食室で使う洗浄剤をせっけんに切り替えてもらうよう行政に働きかけたり、赤ちゃんのいるお母さんにせっけんをプレゼントするなど、身近なところで精力的にせっけん運動に取り組みました。

1980年代～
水環境を守る取り組みを地域や行政とともに

組合員は活動をすすめる中で、水問題は地域の水環境、ひいては地球環境にまでつながっていると考えるようになりました。自然と共生する生活のあり方を地域と共に考えていこうと、河川の水質調査や親子での水生生物観察など、地域の水環境を知り、守る活動に取り組みました。熊本県では地域住民を巻き込み行政とも協力して、合成洗剤を使わずにせっけんを使うことで蛍が飛び交うふるさとの川を取り戻す「ホタルの里づくり」に取り組むなど、各地で水環境を守る運動を地域の中に広げていきました。

現在は掘割のある美しい風景で有名な福岡県の柳川では、1977年、汚染された掘割を暗渠（あんきょ）にする計画があった。一方で、掘割を守ろうという気運が高まり、行政が主導の清浄活動に地域の人々も参加。住民にせっけんの使用を呼びかけ、見事に美しい掘割を甦らせた。これをきっかけに、各地で計画されていた川を暗渠にする政策に反対する取り組みが、せっけんをすすめる運動と合わせて前身生協の間に広がった。

※地下に埋設したり、覆いをして見えなくなった水路。高度経済成長期、道路拡張や下水道整備のために多くの水路が暗渠にされた。

市民が川に親しみ、水環境の大切さを知って守っていく活動として、1985年から福岡市の室見川河畔で数年に亘り行われた「むろみ川まつり」。前身生協が企画して始まったまつりは、地域の人々が主催する会に発展した。

せっけんを使いたくて、生協に仲間が集った

合成洗剤が引き起こす水環境の問題に危機感を持ち、行動を起こし、グリーンコープのせっけん運動の先駆けとなった組合員に、当時の活動や思いについて聞きました。

市吉七海（いちよし ななみ）さん

1989～1993年度グリーンコープ連合組織委員長。1978年にいいづか生協、その後福岡県北生協の設立に関わり、グリーンコープへ。組織委員長としてせっけん運動を率いた後、地域福祉の分野に関わった。

せっけんを手に入れるために生協をつくりたい

1970年代に私が生協づくりに関わったのは、せっけんと無農薬のレモンが欲しかったから。当時の泡だらけの川の水が私たちの飲み水になると思うと、これ以上水を汚してはいけない、どうしてもせっけんを使いたいと思ったんです。でも市販されていたのは合成洗剤がほとんどで、せっけんを手に入れることは難しかった。生協をつくり人が集まればせっけんを取り扱うことができると思い、PTA活動の仲間に呼びかけました。

でも、まとまった注文数がないとメーカーはせっけんを作ってくれません。だから組合員を増やすために一生懸命せっけんを広げる活動をしました。PTA活動には子どもが小さい頃から長く関わっていたので、仲間もたくさんいました。当時は環境汚染が問題になっていたから母親たちの関心も高く、せっけんの話をすると、たくさんの人が集まったものです。自ら「せっけんおばさん」になって、活動には小さな洗濯機を持ち込み、実際に洗って見せました。「コツが分かればせっけんを使うのは簡単よ。せっけんなら、ふわっと気持ちよく仕上がるのよ」と、せっけんの良さや上手な使い方を事あるごとに伝えました。

地域や全国の仲間と共にせっけん運動を展開

せっけんの供給量が増えないことには、合成洗剤に負けない買いやすい価格にすることができない。そのためには、利用する人を増やさないといけない。そこで、子どもの学校の先生や、地域でせっけん運動をしている仲間たちとも協力して、利用を広げました。それをきっかけに、全国の協同組合や生産者団体などが連帯する「協同組合石けん運動連絡会（以下、協石連）」に出会い、せっけん運動をさらに広げていきました。

全国の他の生協とも連帯して、共通の商品を開発し、利用普及に取り組みました。

せっけん運動が様々な運動の起点に

1988年にグリーンコープが設立してからは、連合組織委員長として「シャボン玉フォーラム」の運営を担い、〝せっけん派〟生協としてのグリーンコープの足固めをしました。「せっけんで仲間づくり」は、私たちの合言葉でしたね。

せっけんは、私たちが生きる環境について考える入り口です。生命を育む食べもの運動を展開するグリーンコープにとって、とても大切な運動として、これからもせっけん運動に取り組んでほしいと願っています。

1988年
〝せっけん派〟が大同団結してグリーンコープに

1988年、九州・中国地方の25の〝せっけん派〟の地域生協が集まってグリーンコープを結成しました。他生協の中には、便利で安価であるという理由で、当時から合成洗剤を供給しているところもあります。グリーンコープには「生命」に寄り添いたいと願う生協が集いました。その根幹にあったのは、母親の思いで選んだ、人にも環境にもやさしい「せっけん」を使い続けること。それだけは譲れないと考えたのです。

1988年～現在
思いをつないでせっけん運動を

グリーンコープの組合員は〝せっけん派〟生協としての誇りを持ち、世代交代しながらせっけん運動を続けてきました。

しかし、メディアで盛んに流されるCMの影響で、家庭で使われる洗浄剤は圧倒的に合成洗剤が多いという状況でした。一方、せっけんのシェアはかなり低く、グリーンコープのせっけんの利用率も増加傾向に転じない状況が続きました。組織委員会を中心に各単協でも、組合員は何とかせっけんの利用を広げたい、どうしたらせっけんの良さを分かってもらえるのかと頭を悩ませ、実際に2台の小型洗濯機を持ち込み合成洗剤とせっけんの汚れ落ちを比較したり、安全性を確認するために貝割れ大根の栽培実験をしたりと、それぞれに試行錯誤しながらも一生懸命せっけんの良さを伝えていきました。同時に、組合員のニーズに応じて、時代に合ったせっけん商品の開発をメーカーと協力しながらすすめ、バラエティ化も実現してきました。

また、思いを同じくする全国の生協などと共に「シャボン玉フォーラム」を毎年各地で開催。せっけんの利用と水環境について考える機会としています。毎年春と秋にはせっけんの利用を呼びかける強化期間として「シャボン玉月間」を設け、工夫を凝らした学習会やイベントなどで、地域でせっけんの良さを伝えています。

共生の時代1990年3月号より
ふくおか生協糸島センター美容室（当時）では、せっけんシャンプーで洗髮をしていた。

共生の時代1992年5月号より
せっけん学習会では小型の全自動洗濯機を会場に持ち込み、せっけんの使い方を伝えた。

1993年に鹿児島市で開催された「93シャボン玉フォーラムIN鹿児島」では、グリーンコープかごしま当時が現地実行委員会を担った。グリーンコープエリアで開催される際には、開催地の単協が運営を担っている。

共生の時代1997年5月号より

1995年、合成洗剤を使っている若い組合員を対象とした「三〇〇人洗剤アンケート」を実施した。その意見を活かし、誰もが使いやすい洗濯用粉せっけんを開発。溶けやすく、コンパクトになって、香料入りも登場。組合員に評価され、せっけんの利用がグンと上がった。

グリーンコープ30周年記念特別企画　30th Anniversary　ありがとう　これからも

環境のこと、家族のからだのことを考えて せっけんを使おう

洗浄剤の歴史

せっけんは、約5千年前から人々に使い続けられ、その安全性は歴史が証明しています。しかし二つの世界大戦で、せっけん原料の動植物性油脂が軍需品の原料として大量に使われ不足したことから、石油を原料とする合成洗剤がドイツで開発されました。

1960年代、石油化学工業の発達や洗濯機の普及に伴い、合成洗剤が大量に生産され、広告などのイメージ戦略によって一気に市場へ広がりました。

家庭から排出される化学物質

私たちが暮らす生活環境には、様々な化学物質があふれています。これらは大気や河川、海、大地に排出され、その中には人の健康や多くの生物に影響を与える有害物質も含まれています。国は1999年に法制化された「※PRTR制度（化学物質排出・移動量届出制度）」により、事業者に化学物質の排出量・移動量を把握し届け出ることを義務づけました。

市販されている洗濯用・台所用合成洗剤の中にも、PRTR制度の対象である化学物質が使われているものがあります。（図1）

下水処理場と合成洗剤

私たちが洗濯し、食器を洗った水は、住んでいる町の下水処理場で浄化されて河川や海などに流されるか、下水処理場がない場合は、直接河川などに流されます。つまり、家庭で使われる洗浄剤は、最終的には海に流されるということです。

下水処理場では、汚水を大きなプールのようなものに貯めて、ごみを沈ませる過程を2回ほど経て、微生物に汚れを分解させます。その後、塩素消毒をして河川などに放流します。しかし、合成洗剤に使われている界面活性剤などの化学物質は微生物を弱らせるので、下水を処理するスピードや能力を低下させると言われています。

ここが違う せっけんと合成洗剤

せっけん		合成洗剤
ヤシ油、米ヌカ油、牛脂など動植物油脂が原料。それに水酸化ナトリウムや水酸化カリウムを反応させて作る。製造工程は、昔から変わらず、とてもシンプル。複雑な工場プラントは必要ない。	原料	石油から生成された化学物質が原料。地球の環境汚染が叫ばれるようになって、ヤシ油など天然油脂を原料にしたものも使うようになってきた。製造には複雑な工場プラントが必要である。
せっけんは環境中に放出されると自然界の金属イオン（マグネシウム・カルシウムなど）と反応して不活性化し、金属せっけん（せっけんカス）になる。組成が単純なので、分解されやすく、約1日で水と二酸化炭素になる。	生分解性	少しずつ分解はするが、分解しきれないものが自然界に残ってしまい、河川や海の生態系への影響が心配される。
自然のサイクルの中で分解されるので、人体への影響はない。せっけんカスも、生きものの餌になるほどで、安全。しかし、せっけんでも使いすぎないことが大切。	環境や人体への影響	高温・高圧をかけ化学変化させて作られるため、自然界には存在しない分子構造になっている。そのため自然界では分解されにくく、環境や人への影響が懸念される。
自然へのやさしさも歴史が証明している。これまでせっけんが問題になったことはない。自然の生態系を破壊せず、環境にやさしく、安全なのはせっけん。	だから	植物由来、天然由来、無添加、抗菌、弱酸性など、いいイメージのものが続々と出ているが、その正体は分かりにくくなっている。何が無添加なのかなど、成分表示を確かめることが大切。

実際に表示を見てみよう

私たちが使っている洗剤がせっけんか合成洗剤かを見分けるには、商品のパッケージに記載されている表示を確認しましょう。

品名：洗濯用せっけん
用途：綿、麻、レーヨン、合成繊維用
液性：弱アルカリ性
成分：純石けん分（65%脂肪酸ナトリウム）
アルカリ剤（炭酸塩）

せっけんは、成分が「純石けん分（脂肪酸ナトリウムまたは脂肪酸カリウム）」と表示されているものだけ！

※浴用やシャンプーなどに使うせっけんは、「石けん素地」または「カリ石けん素地」と表示しています。

品名：洗濯用合成洗剤
用途：綿、麻、合成繊維用
液性：弱アルカリ性
成分：界面活性剤（25%、直鎖アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウム、ポリオキシエチレンアルキルエーテル）、水軟化剤（アルミノけい酸塩）、工程剤（硫酸塩）、分散剤、蛍光増白剤、酵素、香料

柔軟剤にも合成界面活性剤が

柔軟剤には一般的に陽イオン系の合成界面活性剤が配合されており、衣類に付着したまま残ることで柔軟効果をもたらす。※陰イオン系、非イオン系などの合成界面活性剤よりもかなり皮膚刺激性が強いので、使う人の体質により肌トラブルを起こす心配もある。

※陰イオン系の合成界面活性剤にはLASなど、非イオン系にはポリ（オキシエチレン）＝アルキルエーテルなどがある。

せっけんで洗うとふんわり仕上がるので、柔軟剤は必要ありません。

蛍光増白剤

汚れを落とすのではなく、白く見えるように染める染料。国により、赤ちゃんの肌着などには使用をできるだけ避けるよう通達されている。ガーゼ・包帯や食品包材などへの使用は認められていない。

香料

合成洗剤などに使用される香料には、化学物質が多数使われている。分解されにくい性質のため人体への蓄積が懸念される。近年、香料アレルギー（化学物質過敏症）などが増えている。

グリーンコープでは、せっけんに使用する香料も、組合員で確認したものを使用しています。

(図1)

家庭から排出された化学物質の割合

※平成29年11月環境省発行「PRTRデータを読み解くための市民ガイドブック」より引用

第一種指定化学物質
ポリ（オキシエチレン）＝アルキルエーテル
（アルキル基の炭素数が12から15までのもの及びその混合物に限る）
洗濯用・台所用・住居用合成洗剤、シャンプー、化粧品など　35%

ジクロロベンゼン
家庭で使用される衣類の防虫剤、トイレの防臭剤など　18%

第一種指定化学物質
直鎖アルキルベンゼンスルホン酸及びその塩（LAS）
（アルキル基の炭素数が10から14までのもの及びその混合物に限る）
洗濯用・台所用合成洗剤、化粧品、農薬など　17%

7%

第一種指定化学物質
ポリ（オキシエチレン）＝ドデシルエーテル硫酸エステルナトリウム
洗濯用・台所用・住居用合成洗剤、シャンプー、ボディソープなど

5%

第一種指定化学物質
ドデシル硫酸ナトリウム（別名：ラウリル硫酸ナトリウム）
ハミガキ、洗濯用・台所用合成洗剤、シャンプー、化粧品など

4%

2-アミノエタノール

その他　14%

排出量合計4万6千トン／年

※PRTR制度

人の健康や生態系に有害なおそれのある化学物質による環境リスクを減らすための制度の一つ。化学物質の排出・移動に関する情報を国が1年ごとに集計し、公表する。対象となる化学物質は、人の健康を損なうおそれ、または動植物の生息もしくは生育に支障を及ぼすおそれがあるもので、第一種指定化学物質と第二種指定化学物質の二つに区分されている。第一種指定化学物質を製造または使用した事業者は届け出の義務がある。

＼せっけんに替えてほんとうに良かった！／

せっけんの良さを実感して試行錯誤も楽しく

グリーンコープかごしま生協　亀崎 恵理子さん

組合員になりたての頃、食器洗いのせっけんを使ってみましたが、ヌルヌルが残ると感じて挫折。その後、参加したせっけん学習会で合成洗剤のしみ込んだスポンジを新しいものに替え、洗う前に食器の汚れをふき取るというコツを聞いて、再チャレンジ。すると、すっきり洗えてキュキュッと仕上がりました。その上、それまで悩んでいた、冬の手荒れも無くなりました。それから、洗濯もシャンプーも、せっけんに替えていきました。せっけんの良さを知ってからは、試行錯誤も楽しんでいます。

子どもの肌がいつのまにかきれいに

グリーンコープ生協おおいた　渡辺 理恵さん

子どもの乾燥肌がとてもひどかったため、肌に優しいという「無添加」や「植物由来」のボディソープや他の洗剤を選んで買っていました。グリーンコープに入り、私が良いと思って使っていたのは合成洗剤だったことがわかり、すぐにせっけんに切り替えました。気が付くと子どもの肌がきれいになっていたんです。今では、出産された方に、必ずせっけんをすすめています。せっけんかどうかは商品の裏面表示を見るとわかりますが、グリーンコープのカタログで買えば安心ですよと伝えています。

「植物性洗浄成分」「天然由来」「無添加」と書かれている洗剤

人や環境にやさしいとイメージさせる言葉だが、ほとんどが合成洗剤。原料が植物性でも、石油などから作られる合成界面活性剤と同じ成分が配合されていることが多い。また、蛍光増白剤、漂白剤など特定の物質が入っていないことを、「無添加」と表示している「合成洗剤」商品もある。

自分に合うシャンプーを季節によって使い分けています

グリーンコープ生協ひょうご　鍬田 瑞穂さん

せっけんの良さは、肌や環境に優しいところ。家族みんな肌が弱いので、せっけんに切り替えました。長男の湿疹や、背中のブツブツが改善され、ますます好きになりました。今では家中の洗う場面でせっけんを使っています。シャンプーも大好きです。色々な種類の中から季節によってシャンプーやリンスを使い分けています。おかげで、髪がツヤツヤになりました！

せっけんはコツさえつかめば、こんなに便利！

食器洗いは、泡立てが大事

食器の汚れをふき取り、スポンジに直接せっけんをつけて泡立てる。せっけんで洗った食器は水がかからないように置いておき、流水でひとつずつすすぐと、ヌルヌルが残らずすっきり。

気になる首回りの汚れには？

あらかじめ、液体せっけんをしみ込ませたり、固形せっけんをこすりつけておく。後はいつものように洗濯機で洗うとすっきりきれいに。

酸素系漂白剤をプラスして

落ちにくい汚れは、バケツなどにせっけんと酸素系漂白剤（1：2）を30～50℃のお湯によく溶かし、しばらく浸けておく。後は液ごと洗濯機に入れていつもどおりにお洗濯！

一人ひとりの『せっけん運動』で 伝える 伝わる みんなとつながる

共同体組織委員会では、年間を通してせっけんの利用をすすめています。

グリーンコープ共同体組織委員長
佐々木 美由紀さん

HOW TOだけでなくWHYが大事

せっけんを伝えるとき、「なぜ私はせっけんを使うのか」という理由を大切に伝えています。私は合成洗剤の成分が気になり、せっけんを使いはじめました。環境もですが、なにより家族を守りたいからです。

「なぜ（WHY）せっけんがいいのか」が納得できたら、せっけんを使おう!!と思えるのではないでしょうか。

せっけんを使っていない方は、合成洗剤をあえて使っているのではなく、せっけんの情報を知る機会がなかっただけなのかもしれません。自分の「なぜ（WHY）」に向き合って伝えてみる、そんな一人ひとりのせっけんを伝える行動の積み重ねが大事だと思います。

気負わず楽しくせっけんを伝えていく

「洗う場面すべてにせっけんを」とグリーンコープでは呼びかけていますが、まずは使いやすいところから使ってみてください。そして、手ごたえを感じたら、ひとつずつ使うところを増やしていけばいいと思います。

昨年登場した「お洗濯のしゃぼんナチュラル」シリーズは、組合員アンケートで寄せられた粉せっけんへのお悩みを解決した画期的な商品です。粉舞いせず、溶けやすく、せっけんカスが出にくく、洗浄力もアップしました。評判も上々で、自信を持っておすすめしています。

各単協では、組合員がまつりや地域のイベント、学習会などで、せっけんを伝えています。

やまぐちでのイベントでは「せっけんお悩み相談室」というブースをつくり、使いにくいと思われがちなせっけんを上手に使う工夫を伝えています。

ひょうごでは、キープ&ショップで「せっけんお悩み相談」を行いました。主婦の経験談を交えながら、丁寧にせっけんの良さを伝えています。

かごしまでは、委員会活動の中でクリームクレンザーを作ったり、せっけんを使いこなして家中をきれいにできるお掃除術も伝えています。

やっぱり!せっけん
―使いこなしハンドブック―

せっけんの良さや使い方などわかりやすく解説した小冊子。共同体組織委員会が、毎年紙面を検討・改訂し、発行。各単協のせっけんの利用をすすめる取り組みなどで活用しています。グリーンコープのホームページでも見ることができます。

単協では、せっけんと合成洗剤の比較実験など、それぞれに工夫してせっけんをアピールしています。
写真はグリーンコープ生協ふくおか 福岡地域のせっけん学習会の様子。

せっけんのバトンをつないでいく

グリーンコープは「せっけん派」生協として、未来の子どもたちにきれいな水環境を手渡すために、「せっけん運動」を貫いてきました。積み重ねられてきたせっけん運動を誇りに思っています。先輩組合員がつないでくれたせっけん運動を私たちも次の世代につないでいけるように、生命を育む食べもの運動の中の大切な取り組みとして、せっけんの良さをチャンスがある度に伝えていくことを大切にしていきます。